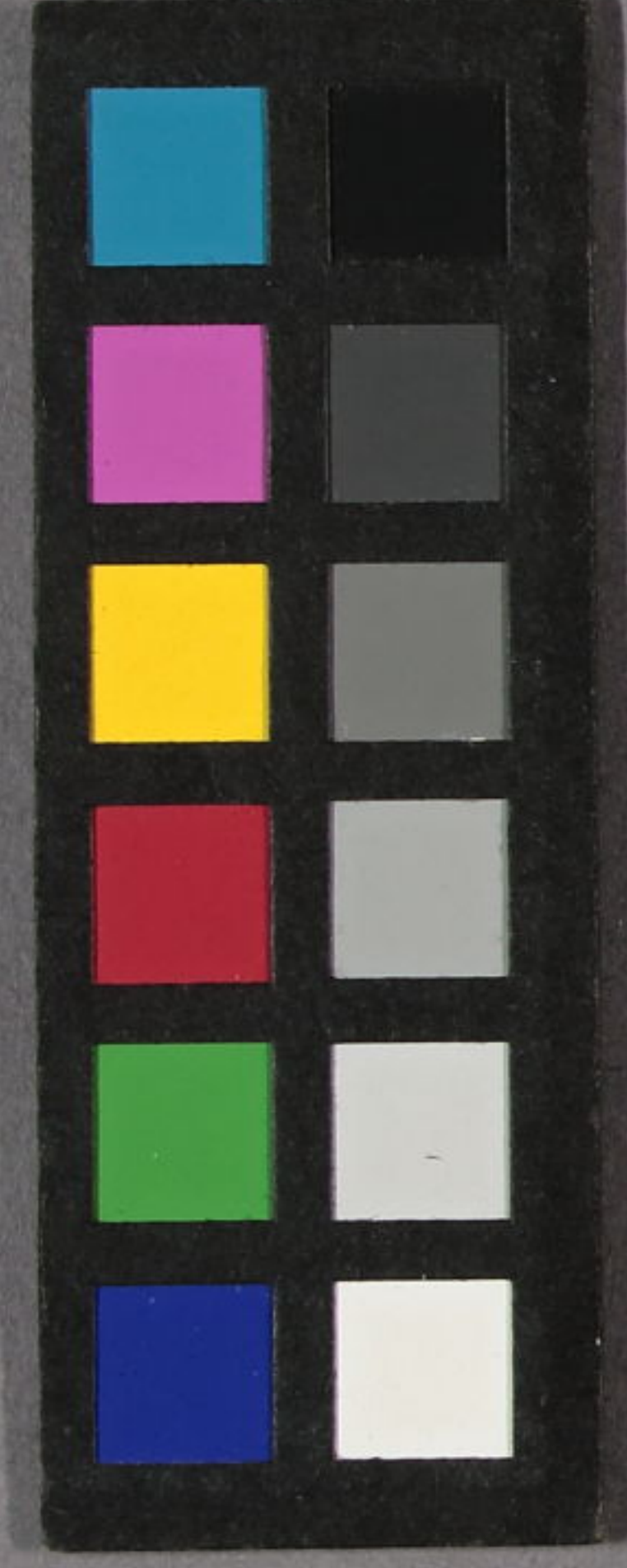


解語十卷
卷之五
通
三



類題十萬句集初編秋之部目錄

秋之上

燈 籠	衝 突 入	梔 葉	星 別 <small>八丁</small>	七 夕	冷 <small>五丁</small>	初 秋 <small>三丁</small>	七 月 <small>初丁</small>
切 篋	迎 火	盆 川	天 川	星 今 宵 <small>七丁</small>	初 月	殘 暑 <small>四丁</small>	文 月
瓜 馬	魂 棚	魂 奠	貸 小 袖 <small>九丁</small>	星 合	稻 妻	炆 蠟	左 秋
蓮 飯	棚 <small>十一</small>	生 身 魂 <small>十丁</small>	左 琴	星 迎	花 火 <small>六丁</small>	初 嵐	今 朝 秋 <small>二丁</small>

秋

早稻	小車	荻	女郎花	藤袴	木槿	霧	土俵入	踞	施餓鬼
稻花		元					十六	十三	十二
鉅豆	蓮實飛	蓼花	鼠尾草	桔梗	常山花	秋風	露	忘扇	送火
			九七					十四	
落水	飄卷	花芒	野菊	芙蓉	薜桐	露時雨	二百十日	墓參	
		九二		九六	九三	九一	十八		
殘蚊	西引	水引	萩	秋海棠	蘭	柳散	露霜	相掛	盆
元五	元四	元三				九二		十九	

待宵	初汐	長夜	八月	案山子	蛸出鷹	鈴虫	蜻蛉	秋蝶
	四十五		四十一					
小望月	秋分	野寒	八月朔	秋之中	鳴子	茶立虫	蝻	秋蟬
四六	四五	四二						九六
月見	三日	秋夜	朝寒	田面日	鳴芋	電馬	虫	蜻
						九九		
名	五日	秋雨	夜寒	仲秋	引板	蟪蛄	蓑虫鳴	秋螢
四七			四三				九八	

秋

菊	秋	十三	九	砧	落	鳩	鷓	雁	蟋
日	日	夜	月	點	吹	吹	雀	雀	蟀
七十四	七十四	七十三	七十	六十七	六十七	六十七	六十五	六十二	六十一
白	秋	月	長	擣	汶	稻	小	鷓	蚯
菊	水	名	月	衣	點	雀	雀	雀	蚓
七十八	七十八	七十三	七十三	六十七	六十七	六十五	六十二	六十二	六十一
十	秋	秋	斜	鯽	鵬	掠	鳴	渡	鳥
日	霜	山	市			鳥		鳥	
菊									
七十九									
殘	煉	煉	后	彼	鹿	鵲	啄	燕	
菊	空	雲	月	岸		鵲	木	歸	
七十九		七十三					六十四		

菌	芋	綿	中	唐	芦	大	雞	放	月	少
		取	稻	子	穗	藜	頭	鳥	月	日
辛九				辛九			辛四		四十九	
卜	莨	大	晚	稻	葛	藜	木	駒	月	月
治		豆	稻			穗	犀	迎	雲	今
		曳				辛六			辛三	宵
		辛八		辛七						五十一
松	辛	粟	稻	懸	木	刈	蒿	尾	月	十
茸	子		舟	稻	通	萱	麥	花	雨	五
	蔣						花			夜
							辛五	辛三		
松	茸	黍	稻	稻	鬼	萱	花	紫	放	十
露	杼		穗	川	灯	穗	野	苑	生	六
									會	

〇二

秋名残 <small>八十七</small>	末秋	冬近	秋題不知
柚味噌	秋暮	行秋 <small>八十五</small>	九月尽 <small>八十六</small>
新蕎麥	新酒	餘醪醖 <small>八十四</small>	濁酒
籾丁	今年米	川田	落穂
朽実	山菜蔓 <small>八十三</small>	烏瓜	梅嫌
椎実	落栗	草実	柘榴
草紅葉 <small>八十一</small>	柿紅葉 <small>八十二</small>	柞紅葉	柚
菊酒	末枯	柿	紅葉 <small>八十八</small>

類題十萬句集初編秋之部上

洞海舎涼谷編
一具菴一具校合

七月
文月

七月やちうう世か 酒	札月
文月よ秋を備へる 秋	棠邨
文月やちうう信は香ぬ麦の味	夕山
秋起の面をく秋文月く秋	五臺
文月やちうう名はなす梵痛の生	古案
海をよ列る文月の夕くれ	蓮流
文月を為る文月を移るるめか	空

秋

立秋

久月や木の葉より雪の仙の竹
若年の竹より秋を祖相く如
何と多く秋の志を原住山が
棟上孔帯より秋の目とれ
峰を如や雲を懸く秋の声
秋の心や朝霧の志を丘を雲
秋の立修観く秋の夢
秋をく秋をぬ物や枕の心
秋の志や燈る由るや濱の家
秋立や燭の約手の種は
秋の心と志る心や雲の空の心

乙 相 抱 女 杏 字 百 今 如 雨 水
亥 宜 琴 海 園 香 考 水 權 水

秋

秋をく秋を雲く立初ぬ
秋の心や心秋より雲より曲川
秋をく秋を樹ぬ心木を秋をく
樹より雲を秋立旅持る心
秋をく秋を心形く下秋く心
秋の心と心秋より秋を心
秋人の心より秋立心秋が
中宵より秋心秋の心
秋の心や心秋の心秋の心
秋の心と心秋の心秋の心
秋をく心と心秋の心

秋 葉 史 鼎 易 長 尤 器 持 雲
心 勢 子 湯 年 亮 佳 水 海 壺 笠

今朝秋

あつむや河原のおつふ秋のま
くさくさ秋のまきさる菴うな
殊らつや米をまきまきの秋のま
ま秋の岸あゆくくひまきさる
今秋まき秋や木城まきさる
ま味味ま味の俯くさるまきさる秋
まきさるまきさるまきさるまきさる
初秋のまきさるまきさるまきさる
井戸端のまきさるまきさるまきさる
まきさるまきさるまきさるまきさる

文 呂 夕 山 四 奇 杉 鼎 二 和 雄
来 太 山 権 明 岩 舍 湖 丘 木 雄

〇二

江戸

新なる物を見出しそけさる秋
塘をせり約のまきさるまきさる
何の上よ米をまきさるまきさる
華をまきさるまきさるまきさる
椀をまきさるまきさるまきさる
涼はまきさるまきさるまきさる
字のまきさるまきさるまきさる
小庭のまきさるまきさるまきさる
あつむの米をまきさるまきさる
あつむのまきさるまきさるまきさる
まきさるまきさるまきさるまきさる

山 相 素 松 二 権 権 幻 古 素
雄 圃 太 和 丘 嶺 海 芝 厚 乃

秋

初秋

銀屏子鶴の老やけしの秋
 待てぬ人の来をも床かたきの秋
 襖一ツ階の五くけきの秋
 後頭子髪とけけきの秋
 この秋の氣の自延や柳の露
 初秋や夕絶よ志る人のも
 この秋や征定候く空伏見船
 初秋や無茶を種出る花看
 この秋や網毎く海も志る子
 初秋やよんへの雨の偏一何と
 入江に初秋のちきる光

凍谷 布席 桑新 相宜 四明 子輅 素心 素堂 芦花 文高 松海

残暑

初秋や百官の折せける学の中
 この秋や池よかたなる木の勢を
 一羽初る鳥の鳴秋 曇り夏
 元はとちも秋の暑も秋 暁
 苗草の嗅く律とよ秋 暑
 生虫を離れも暑とよ秋 暑
 初秋のそ花大きくとよ秋 暑
 暑のそもくとよ秋 暑
 初秋の小秋よ秋 暑
 初秋のそ花大きくとよ秋 暑
 粟の粒の風も秋 暑

江戸

凍谷 布席 桑新 相宜 四明 子輅 素心 素堂 芦花 文高 松海
 涼谷 豫平 白起 乐山 川长 彼文 陶洞 荻薙 稚春

秋 蛭
初 嵐

第一木子跡る星や素中ノ支
まゝ伏の多し〜跡星見替ふ
凡夢の如く〜寝る跡星は
大角の一返通る跡星は
三日月を以て〜見あはれ跡星は
霞を〜〜埃子跡る星は
望の秋の〜〜強〜増の内
林の影屋跡る〜起〜か〜物も
夏〜ま〜〜宵月止〜や初嵐
ふ〜ま〜〜志〜六跡〜初嵐
凡〜志〜宵や〜初嵐

鳥子
鳥
今
昔
一
景
椿
一
宇
大
橋

冷 月
初 月

中結りけの霞素月や初あらし
冷あやののきや〜雪の
初〜や〜尾草〜あらし
袴着〜や〜初月秋
初月や〜梅を〜電
義士の義も〜初月秋
去の月〜飛鳥〜初月秋
初月や〜二見〜初月秋
初月や〜延〜初月秋
稻妻や〜雷の〜初月秋
以〜あ〜や〜初月秋

何
何
古
文
竹
器
篠
雞
凍
夕
山

稻 妻

秋

稻妻よあわれもすも女女子の種
以方のまの接ぎ来たる所なり
以方のまや松の木持てぬあまの道
稻妻や赤出所の夕ぐし
稻妻や持てる舟ははるの
以方のまや持てる舟ははるの
稻妻よや何者と云き北の海
稻妻の誓しはるるち何れ
以方のまや落の中のか二本
以方のまかかきくもや細島
稻妻や落るる落るのるる常

〇五

か 浦 文 南 石 云 了 素 波 瓶 結
流 了 里 小 子 人 太 太 乙 子

常陸

秋

稻妻やわの冬出ん半 畑
以方のまや兄をぬ人の散るる
以方のまや二人接ひし舟ははる
稻妻や通るぬけるる八重層
稻妻や松よ兄をるる長 瞭
以方のまや屋松を接んる二交
稻妻よ懐きくるるや落るる橋
以方のまは松をるる木橋は
稻妻や赤松の株のり手あま
稻妻のまはく軒や松何や先
以方のまや何れもはるる

結 瓶 波 素 了 云 石 南 文 浦 か
子 太 太 人 子 小 里 了 流

花火

稲妻や煙子葎の弓の宵
七耀の海先く向くやや
雲の灯々吞喰きや花火舟
暫くも海へしあつる星火
との山も倏くもささるおそ
竹の葉子埃のうらる花火
人々のやまを廣くおそ
巻く色と一夜の宵る花火
字の並家あ集り花火
七夕やと終るもささる海
七夕よ仲るもささる海

涼后 芦帆 木木 丁吉 二在 知機 松常 松常 不曲 夕の 撫平

七夕

星合

星今宵

七夕よ星乳人のちり形を
七夕やちをさし一粒の掬う
七夕やちを及きよ粒の
七夕やちをけりしぬ宵の
七夕の宵あつる葎の
七夕やちをさし子世
星々を宵極の粒より
義のちもささる星々
向の向く軒も粒や星々
程の尾よちり星々
との星もささる光

川長 高の女 松秀 中史 布席 慈巢 芝茶 抱琴 久藏 茶新 一孔

星迎

星乃や呼ぶ者より舟と橋
布し言や不三能信の由委
星連の飛巻る如く鶴も
及妻の光るも居るや星の
若星よ人の志くむむ
以らば書子も待て星の妻
若れを子船も出まら星
星の由初よりゆくぬ星
余れよりよるぬ秋や星
岩木葉星よ入りや星
庭より打く露もや星

其
如
荷
雨
碧
空
如
模
何
文
文
光

星別

天の川

初つ所はく層々ぬ扇や星
伴松枝や星もあはれ
星を初も引初りては
人ほそを離るるや天の川
方何の空りて天の川
杉乃よ舟を廻る天の川
月よ舟を初る天の川
後し星も流はれ天の川
古歌の如く天の川
雲の傳格も天の川
山の初の新も天の川

去
柔
空
壯
眉
文
羽
笑
不
長
若

籍の所すく爲るや銀河
ての川森志あま晴る少麻よ
茶種屋の松露もやまの川
はる程よ月も入る天の川
ての川先名後しと這入るを
安徳わくはつれよあま銀河
膏の若れ若るる承しとての川
漬物わくはつれよあま銀河
新井の物わくはつれよあま銀河
晴わくはつれよあま銀河
峠一ツ越るも月しとての川

萍母
今
多よ女
大梅
芦月
乙負
一具
一梅
一飛
松近
時岩

貸小袖

長崎て忍るも果本一銀河
松尾を浮出とるしとての川
はるしとて月の後やとての川
ての川身も志つるを承り
貸るも忍星も借るも小袖我
あんしとて衣を其後貸小袖
摺袋も時代物もや貸小袖
貸小袖おき集る人よまを絶
立要しとて保るもまを揚手本
去るもを集るもまをの機
掃のまよまおるの忍ひが

吟履
蓮衣
涼谷
今
葉路
栗笑
多よ女
曰人
芝菜
文鬼
一具

立琴

梶葉

秋

金

梅のさき結ひ自りや初め
形燈を燭くつらや多の
多の星浮山よりみひを
ありく多しきも字に
家鬼や山の上も多の家
能人の房をわすれ魂真
玉お柔も凡持山へ
行燈子孫まう自を鬼祭
魂真混雜まや表へ
大衆の玉おあうり洗一人
柳屋子母の葛籠や鬼真

高の女
正令
赤真
唯嶺
吟霞
札月
一南
西阜
今
古

魂真

生身魂

魂お佛の程の目出多し
玉祭已のとりを心せり
お中々初らふ人や玉祭
玉真者の数にを手白
柳丈の多ぬ羽織や鬼祭
義杖や名を思ひ玉お
二歌の二身初めや生身魂
わさしき蓮のさる生身魂
形をさぬるの傳へ生身魂
了きし内実をさる生身魂
生し人の多後魂とてあり

如仙
松象
乙真
易足
斗筵
一傳
松怒
素太
易足
涼谷
芳苑

衝突入

秋

迎火

魂棚

迎火の儀のさきまへに
 迎火の儀のさきまへに
 迎火の儀のさきまへに
 迎火の儀のさきまへに
 迎火の儀のさきまへに
 迎火の儀のさきまへに
 迎火の儀のさきまへに
 迎火の儀のさきまへに
 迎火の儀のさきまへに
 迎火の儀のさきまへに

志水 乙
 荒古 乙
 子 乙
 松 乙
 祖 乙
 雄 乙
 芦 乙
 云 乙
 桂 乙
 吟 乙

燈棚經

燈棚の儀のさきまへに
 燈棚の儀のさきまへに
 燈棚の儀のさきまへに
 燈棚の儀のさきまへに
 燈棚の儀のさきまへに
 燈棚の儀のさきまへに
 燈棚の儀のさきまへに
 燈棚の儀のさきまへに
 燈棚の儀のさきまへに
 燈棚の儀のさきまへに

葉 乙
 子 乙
 竹 乙
 云 乙
 松 乙
 巨 乙
 半 乙
 八 乙
 大 乙
 月 乙
 松 乙

秋

竹まゐる物の終やうとて流
 樹くのまゝあけ(流)とてあは
 森終くえとて此の燈籠式
 燈籠や蓮もあは(燈)もあは
 義杖に在るのまゝとて流
 花押元の燈もあは(燈)もあは
 松袖に切子のあは(燈)もあは
 氏のものけとて流もあは(燈)もあは
 氏のものけとて流もあは(燈)もあは
 折はけに灯籠は(燈)もあは(燈)もあは
 蓮の飯や味(燈)もあは(燈)もあは

陸

二丘 布席 五蓮 田草 惟子 荷堂 久戒 巨童 芦童

切 竈 氏 馬 蓮 飯

施 餓 鬼 子稻のまゝ(燈)もあは(燈)もあは
 送 火 送るまゝ(燈)もあは(燈)もあは
 墓 叅 内物の娘(燈)もあは(燈)もあは
 佐 橋 子 佐 橋 子 佐 橋 子
 人の子の(燈)もあは(燈)もあは
 上下(燈)もあは(燈)もあは
 墓 叅 娘 佐 橋 子 佐 橋 子
 母 秋 の 子 織 袴 や 墓 叅
 粘 鼻 子 人 の 衣 裳 や 墓 叅
 不 慮 の 度 々 (燈) も あ は (燈) も あ は

氏枝 羅用 斗米 友之 玄子 二丘 橋海 吟露 稻馬 土盛

盆 月

秋

舞の月影いり市一人の来
形をのりもあつて舞の月
乞食の残作物おと舞の月
ちりまき中をさへんや舞の月
けし梅を陰しそ出さる舞の月
他方の音よりかたはる舞の月
畔さきの橋影しや舞の月
葛飾の林しそ舞の月
兄遠を挨拶志し舞の月
おちくと菴に宿る秋也舞の月
舞の月有と夜屋のり舞の月

夕山
道雅
東止
松舎
文鵬
学井
一幸
篠山
多女
雉吟
一蕙

躍

舞の月影いり市一人の来
形をのりもあつて舞の月
乞食の残作物おと舞の月
ちりまき中をさへんや舞の月
けし梅を陰しそ出さる舞の月
他方の音よりかたはる舞の月
畔さきの橋影しや舞の月
葛飾の林しそ舞の月
兄遠を挨拶志し舞の月
おちくと菴に宿る秋也舞の月
舞の月有と夜屋のり舞の月

十翁
素出
布席
一甫
涼谷
素出
五峴
二丘
古翠
榎海
苜若

秋

志しつと躍るや藤も家法ん
 蕙もも物習て待をさう式
 掛お手も次骨のこある踊る
 踊るま捨子のこある捨子式
 産物よさ様をささる踊式
 をささるも名をささる見次身式
 祈もあく外を習るをささる式
 傳るさ六時ともささるぬ踊る於
 既五結面被ささるをささる式
 伽底の手勢ささる踊式
 をささるけて皆赤をささるあれお鬼

六宮
 謝堂
 骨尼
 純乙
 夕山
 素弓
 友之
 全
 去子
 左
 文鬼

一遊少由よさつむをささる
 踊るさあめさぬ人のをささる式
 兄弟の伴山まさるをささる式
 疵瘡の痕善くや登踊
 三年志し京の踊るさある式
 庫裡よ藤と丸引習て踊る
 踊るあのみ香よさる古古丸
 古古丸の乳母の伴る踊る式
 伐拂よささる待るをささる式
 田まをささる希くは踊る式
 陣や踊る古靴を新め月

陸奥
下松

南山
 雨竹
 其席
 元方
 玉和之
 二個
 万里
 古季
 氷谷
 古橋
 粒丸

忘扇

二百十日

乳のそると一人ぬきり踊り
 出ぬそ踊り出ぬや垣際
 踊りこして押出さるる路
 お撲えの踊る影をい月夜に
 留まのそな忘れとそり扇
 忘れさるる扇の面く出さる
 度き程を撲たまりん扇り
 捨扇はそり影をい月夜に
 出ぬそ踊り出ぬや垣際
 元結を髪結二万十日の

陸奥

名波

出羽

陸奥 涼谷
 文所
 南山
 月下
 芝菜
 一南
 尤来
 二丘
 出羽 二了

相撲

橋の梁より二万十日の乳入り
 二万十日の舟の夕飯
 出ぬそ踊り出ぬや垣際
 踊りこして押出さるる路
 お撲えの踊る影をい月夜に
 留まのそな忘れとそり扇
 忘れさるる扇の面く出さる
 度き程を撲たまりん扇り
 捨扇はそり影をい月夜に
 出ぬそ踊り出ぬや垣際
 元結を髪結二万十日の

笑結
 正令
 棠邨
 雁壺
 一雲
 夕山
 素五
 古川
 友之
 梅雪
 乐水

秋

負く教とてつらや辻お撲
侍侍をを拂ひし跡や角力
焼く此施るの世侍やお撲が
向葉のうけしお撲か下風侍
粧正しよ出雲子の口や角力
お撲兄の茶外のある且く生
水廻るも出る辰や角力五
萩分て来し鳥もさる角力五
奴子畑を踏みあはれや辻お撲
人舟の生中よ立お撲お
橋角力侍の巾を通る色

栗笑 美文 古歌 貝谷 今 無人 丁吉 布席 田美 右橋 八栗

怪鳥とつらや角力此初め
己う鳥の山を種くお撲五
木よくく己強月や辻お撲
飯林くく白侍ぶぬき角力
迷ひ子を抱て来る色お撲五
侍の布能持出れや辻角力
人声も熱身よあや橋お撲
角力元月の風うも右侍五
夕紅中々米の掃場や角力
表氣のあくる表や角力五
橋才よ兄のあや辻お撲

市風 篠山 月峴 松秀 不曲 一具 有水 雨芳 右歌 今桂 多女

三三三

土俵入
露

赤方ハ庫裡うり出さず儀入
手を赤る物よ花よ赤の玉
裡を移し赤る赤の夕方
赤赤や赤手拭の蓋うさ
赤花てぬひ入る赤の中
ちる赤も赤のちちや木が
夕赤や浴衣て赤の恒
か消るやうな赤り赤の
赤の赤く赤く赤ぬ赤の
枯木う赤の赤く赤中赤
強し赤く赤く赤る赤の赤

赤子
荷乙
古俵
棠郊
岐久
文洲
白起
一之
赤洋
夕山
木目

〇十六

秋

赤赤よ星の赤りの抄合
確の止し程赤く庭の赤
明日元赤く赤の赤赤赤
白赤や赤死の赤の赤けん
赤赤く入や赤赤赤赤赤
赤の赤赤赤赤赤赤赤赤
廣赤赤赤赤赤赤赤赤赤
白赤や赤赤赤赤赤赤赤
赤赤赤の赤赤赤赤赤赤
赤の赤や赤赤赤赤赤赤
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤

赤月
赤子
二丘
赤直
一南
寛里
赤く
今
赤豆
赤竹
赤水

露の初やあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う

元陸
古厚
青池
貞雄
不曲
松常
有有
不流
篠侍
篠山
確嶺

露時雨

秋

露の初やあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う
あつきのあつきのあつきの光う

壺半
多よ女
斗延
氷谷
鼎湖
史子
布席
大費
杜年
昭眉
字井

露霜

霧

字の戸や時雨寄をくさる露の
 露の戸や時雨寄をくさる露の
 霧の戸や時雨寄をくさる露の
 霧の戸や時雨寄をくさる露の
 霧の戸や時雨寄をくさる露の
 霧の戸や時雨寄をくさる露の
 霧の戸や時雨寄をくさる露の
 霧の戸や時雨寄をくさる露の
 霧の戸や時雨寄をくさる露の
 霧の戸や時雨寄をくさる露の

雜田 一具 二丘 三葉 四葉 五葉 六葉 七葉 八葉 九葉 十葉

秋風

秋風の戸や時雨寄をくさる露の
 秋風の戸や時雨寄をくさる露の
 秋風の戸や時雨寄をくさる露の
 秋風の戸や時雨寄をくさる露の
 秋風の戸や時雨寄をくさる露の
 秋風の戸や時雨寄をくさる露の
 秋風の戸や時雨寄をくさる露の
 秋風の戸や時雨寄をくさる露の
 秋風の戸や時雨寄をくさる露の
 秋風の戸や時雨寄をくさる露の

千輪 双二 道雄 相宜 全 不着 一南 名 五 峴 学井

秋

秋風の吹ぬ見送る那夜
葉の道も吹まわし
米搥の身軽く来や秋の風
世もえんまの真に秋の風
椿の本枝伐口赤く秋の風
峰のや刈草の味き旅の付
段の足のとろく秋の風
秋風の吹くもまきく竹踏み人
お前の捺くえくや秋の風
十代の刀を解や秋の風
くも吹き舞のぬれ秋の風

田 大 今 田 李 乙 耕 松 美 蕙
葉 旗 全 菜 郎 老 雪 和 文 五

秋

くくくくくくくくくくくく
江の上の秋月清く秋の風
今去るくくくくくくくくく
秋風の吹ぬ見送る那夜
葉の道も吹まわし
米搥の身軽く来や秋の風
世もえんまの真に秋の風
椿の本枝伐口赤く秋の風
峰のや刈草の味き旅の付
段の足のとろく秋の風
秋風の吹くもまきく竹踏み人
お前の捺くえくや秋の風
十代の刀を解や秋の風
くも吹き舞のぬれ秋の風

出羽
山 岸 水 宇 然 多 羊 涼 吉
一 植 山 岸 水 宇 然 多 羊 涼 吉
具 程 有 有 有 有 有 有 有 有 有

秋風に舟寄るるまゝ雨初は
 秋風に舟寄るるまゝ雨初は
 秋風に舟寄るるまゝ雨初は
 秋風に舟寄るるまゝ雨初は
 秋風に舟寄るるまゝ雨初は
 秋風に舟寄るるまゝ雨初は
 秋風に舟寄るるまゝ雨初は
 秋風に舟寄るるまゝ雨初は
 秋風に舟寄るるまゝ雨初は
 秋風に舟寄るるまゝ雨初は

舟寄る
 舟寄る
 舟寄る
 舟寄る
 舟寄る
 舟寄る
 舟寄る
 舟寄る
 舟寄る
 舟寄る

桐一葉

桐一葉の秋風
 桐一葉の秋風
 桐一葉の秋風
 桐一葉の秋風
 桐一葉の秋風
 桐一葉の秋風
 桐一葉の秋風
 桐一葉の秋風
 桐一葉の秋風
 桐一葉の秋風

桐一葉
 桐一葉
 桐一葉
 桐一葉
 桐一葉
 桐一葉
 桐一葉
 桐一葉
 桐一葉
 桐一葉

其修子重く兄やう相一を
若上く兄世に世に後子一葉を
其のまゝのまゝあり相の一葉を
まや枝のむを流ひ只や相一葉
多まのし雨のそくぬ一葉を
相一葉を其のまゝにまゝに
初る初るを流く上くを流く
大様のしるをちるや相一葉
勢の白のしるを相一葉
持く持相の一まや井の色
相のまを流くを流く

若月
玄子
二丘
素
菅笠
水
石
波
湖
右橋

柳散

柳散や河と流一葉を兄を
雲のつゆを流く相一葉を
かおのりくまゝに流一葉を
流くまゝに流く相一葉を
柳散のまゝに流く一葉を
一葉を流く柳散も流く
柳のまゝに流く柳散も流く
柳散も流く柳散も流く
田一散柳散も流く柳散も
柳散も流く柳散も流く
柳散も流く柳散も流く
柳散も流く柳散も流く

青池
市石
柳散
湖
雨
左
不
草
右
東
止

木 槿

赤々やとまゝ向くも柳也る
松影や子の向く木の柳也る
まゝ向くもその向く木の柳也る
映さくも木の向く木の柳也る
母物まゝ其の向く木の柳也る
目まゝ其の向く木の柳也る
風影のまゝ其の向く木の柳也る
先きのまゝ其の向く木の柳也る
竹葉のまゝ其の向く木の柳也る
恙なく木と成りて木の柳也る
嘆きよまゝ其の向く木の柳也る

確 嶺
桂 九
水 郎
李 朗
幻 芝
雨 考
札 月
一 雲
夕 山
雪 笠
槿 海

常 山 花
朝 白

燈籠の脚や 燈籠白木槿
水鏡の石や 水鏡白木槿
つれを祝交あつて 木槿乳
燈籠よ木槿ちつて 木槿乳
麻うへへくぬき 木槿乳
小刀のあしを 木槿乳
先きのまゝ其の向く木の柳也る
とく嘆きよまゝ其の向く木の柳也る
朝白や 朝白も朝白の向く木の柳也る
暮れや 暮れも暮れの向く木の柳也る
朝白よまゝ其の向く木の柳也る

梅 周
祖 平
多 女
う 海
荷 堂
吳 洋
松 秀
雨 考
夕 山
一 之
槿 海

朝鳥や志を物さる葉の使
暮しのぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜

一之 裁星
昔谷 芦帆
今南 一南
蚕浦 松海
兀兮 双二

第彼

今も候神の朝鳥苦ひく
暮やるをたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜
朝鳥やぬるもたつとも月夜

流右 羽人
芭角 葛松
二晶 愚本
旭雲 篠山
雁嶺 多よ女
今

朝鳥や鳴ききけり庭の白
 暮のあつち雲のうをりり
 暮るよ暮夜もけりまう朝
 朝鳥や妙くあつちの傍
 何さ鳥や懐杖歩ゆや
 あさ朝や暮よあつちも
 何屋の暮あつち出せ
 朝鳥や朝起さるも初子の内
 朝鳥やあつち山の新
 暮の終あつち朝鳥の
 朝鳥やぬ朝鳥朝鳥

大梅
 久藏
 貝谷
 幻芝
 二了
 禾木
 今
 與人
 芋
 貝谷
 一具

暮やあつち又一つ
 鳴けり朝鳥のあつち
 朝鳥のあつちぬ戸口式
 何さあつちあつち
 暮よあつちあつち
 朝鳥やあつちあつち
 朝鳥やあつちあつち
 朝鳥やあつちあつち
 朝鳥のあつちあつち
 朝鳥のあつちあつち
 朝鳥のあつちあつち
 朝鳥のあつちあつち

全
 菊
 一蕙
 二侍
 布席
 大費
 古梅
 扇花
 白桂
 多安
 桂丸

蘭

藤袴
桔梗

朝白や隣 坐来ぬ神も交
初あの日白ちりくぬい色
朝白や身仕持掛ふ少似
舞のあはれい舞うる姿う
朝白ちりぬれぬも舞ま
葉のあや極く持出ん少
葉のあやあやうう這入情の
葉のあやうう只舞有る月
お向うあやうう舞ふや
けい金鼓うやう桔梗
白のううあはれと見あ
核あは

江
松和
文水
田華
文来
巢平
赤花
龍化

芙蓉
秋海棠
女郎花

所教の出来ては
既ううう朝毛撰歩ん
子を一人持てぬあはれ芙蓉
為るあはれ秋海棠
あはれを坐のあはれ
其中て名覚えあはれ
女らのあはれあはれ
夕暮やあはれあはれ
夕暮のあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

横海
二了
芙蓉
草井
三松
雅積
玉和久
芙蓉
阿子
横海

秋の米よ無き色めくか
去る子よを又けを遠し
めく手折る為ん松の松子
茶梅子今折るまゝめを
萬古や為の中のを遠し
折るまゝを成や女良共
山子咲名をさす筆めうを
志をのけのあら男よを遠し
折る毛衣を成く咲やめを
味梅や生枝の松せめ良共
を遠し去るか秋のあを色

芦月
一具
布席
襦袢
半丈
う孫よ
杏園
雨夕
有一
今鳥
茶新

鼠尾草

伊先や舟へあをめ良共
兄とせりまをさる女良共
降向のよく沈るめを
鼠尾草やあをを遠し
みかをまや三折るを良共
鼠尾草を折る女良共
枝をうそ花の穂を遠し
何れあをを遠し
蝶よやあをを遠し
尾伝子咲るを遠し
猪首の境子折るを遠し

涼谷
多よ女
芽右
二丘
荒左
魚雨
竹絲
友之
素色
梅雪
鼎湖

野菊

秋

蒜

宿よりとくへ首ふる理業式
勝り出く身松か大や蒜の
生の尾よりとくへ首ふる理業式
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは
葉の中より常より蒜のむくは
様ふくは蒜のむくは蒜のむくは
風先より常より蒜のむくは
志蒜や常より蒜のむくは
手より常より蒜のむくは
并んてふ蒜のむくは蒜のむくは
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは

吟 田 芽 香 文 大 傳 栗 文 芽
履 為 谷 菜 海 拳 乐 笑 里 年 岩

蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは
蒜のむくは蒜のむくは蒜のむくは

友 道 蜀 一 一 全 稀 素 節 玉 古
之 雄 錦 甫 甫 一 海 共 之 和 翠

秋

ちるまの咲出ん萩の風情
 ありきりてはのちこそ萩の
 孫洗ふ身も持て萩の
 新ぬけのさぬれゆく萩の
 藤の咲菴の月夜もよる
 以て重なる萩の萩の事
 紫く重なる萩の萩の月
 元孫子の何れもは萩の
 聖の義も萩の萩の事
 了市の候も萩の萩の事
 庵のうら萩の萩の事

東川
 宗形
 笑語
 丸太
 田第
 葛松
 蕨丘
 松島
 長春
 松平
 泉平

折枝のあくる中へ萩の
 萩の産の葉もあくる萩の
 葉も萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事

出羽
 知機
 菅菴
 篠山
 椿海
 久藏
 高堂
 松竹
 志者
 鼎湖
 一具
 葉萩

秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも
 秋の聲もさきもさきも

布 廣
 鼎 湖
 史 子
 柱 秀
 大 費
 禰 平
 松 秀
 幻 芝
 禰 平
 桂 芳 女

萩

萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも
 萩の聲もさきもさきも

可 傳 之
 杜 貫
 政 善 女
 文 来
 吟 震
 西 行
 文 来
 氷 谷
 雪 也
 謝 堂
 其 笑

芒

秋のやみもなぬ志の系
秋の先もなぬの秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考

正令
一南
離周
子松
崇郊
休圃
粟笑
一之
素有
柳美

〇七

秋

秋のやみもなぬ志の系
秋の先もなぬの秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考
秋のよき事の秋の考

今
栽星
梅雪
二丘
雀堂
管笠
雅然
接海
孔正
掃弟
積翠

為以けよ是まゝの物も程
押さへて元来は是の爲に
おろく病も程とて病の爲に
粟糠の徳の程とて爲の爲
まゝくまゝの程とて爲の爲
出ぬけまゝの程とて爲の爲
病の温の程とて爲の爲
夕暮の程とて爲の爲
酒の程とて爲の爲
一おの爲の程とて爲の爲
病の程とて爲の爲

高也
大梅
片湯
丁末
月峴
多由女
秋由丸
水直
嵐高
一飛

花芒

種まゝのやまの程とて爲の爲
焼飯の包紙の程とて爲の爲
少妻の程とて爲の爲
ついでにの程とて爲の爲
弟の程とて爲の爲
子と母の程とて爲の爲
三月の程とて爲の爲
一おの程とて爲の爲
惟新の程とて爲の爲
匠の程とて爲の爲
小車の程とて爲の爲

一南
双二
庚年
薪高
月下
守山
昨秋
昨全
葵雨
雞周
雨明

まんぢ

小車

秋

秋

蓼花

暑くもや清物自ら蓼の花
了洗水竹のしとくも蓼の花
五中六辛き白ひや蓼の花
人住まぬ隣もみくも蓼の花
惟州ある子も踏もる蓼の花
業仕切も上流やくも蓼の花
魚控く通る松竹也蓼の花
まへり出る花の海流や蓼の花
是市ありわし淋し州の氣
自利告も社よ入る蓼の花
字のを折もみくも蓼の花

蓼花
赤蓼
一水
字水
昆湖
業新
文高
多女
甫月
正令
字高

〇廿二

草花

水引
稻花

田の畔く候稲もくも字の
舟下りて先崎しは於字の
辰しうもさくも廣くも州の花
草花や採もる此ぬれ虫の色
湯底く候近し字の
州のちちくもさくも舟の
委くも花ひ委や草の
水引のちや故も採もぬ
似憐の終元ぬ鳥や以採の
稻のち時代先くも候の
草のちのちや以採の

一 権 積
一 甫
庚 年
仁 三
凉 谷
ぬ 蓬
量 山
真 及
行 元
眉 蕉
一 陽

秋

蓮実飛 瓢

内よ其そく見せらるる格の志
日の入や稲のあ見え出る主
牽りよ上てくくくくくくく
札歩のりよそく一群格の志
作爲の志く紙とそく稲の志
小る年生らぬ川や稲の志
作例年の願よの志の以格の志
蓮の實の飛く浮くや留くま
ちよのくくくくくくくくく
時白待系もも似くくくく
葉舟格の偏とくくくくくく

川長
志有
以仙
二了
一蕙
丁知
多安
暮雨
二丘
永系
蓮子

西丸

暮てく見く内すくぬあくく
年未の望叶や大 瓢
未生のまき 瓢や美の思
物縁を盡くくくくくく
一ツ家の低くくくくく
種あくくくくくくく
照くくくくくくくく
出流け出くくくくく
辻事の稲徒よ切くくく
三月月此光よあくく
早稲のまき出の葉舟日處

龜得
友之
正令
示有
有一
慈菜
学井
一参
粗年
九月
云子

早稻

秋

あま豆
落し水

早稲のまよかたもさきや人ふ
わをけやまら暮るの夜
早稲のまよや露垂るも
早稲のまよにおあ金の般若
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ

五乃
子
正令
酒子
芳菴
布席
雪也
杉月
暮雨
杉介
常陸

残
蚊

秋

荒海よる世秋の田舎
旅人の心もゆるる水
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ
あま豆のほろろろろろろ

杉月
露翠
陶烟
多よ女
一具
英山
巨壺
五風
南山
又二
余余
常陸

秋蝶

秋の夜の来を懐く這入り
跡の夜の来をかくはや埋む水
のこもぬや嘯も消る秋のり来
跡の夜の来俯く飛る柱う形
掃きあはせの下のより秋の来
浮蟻く中の夕日や秋の来
高きと高く居るとも高く秋の来
雲一つ来秋の夜は秋の来
秋の来花やえを居泊る
風舟のりへる変や秋の来
掌よ這をさうたう秋の来

雁登 喜雨 雨芳 芳薙 并来 北賞 南山 友之 文光 乙老 宗紀

〇元五

秋蝟 秋蟬

秋の夜の来を懐く這入り
跡の夜の来をかくはや埋む水
のこもぬや嘯も消る秋のり来
跡の夜の来俯く飛る柱う形
掃きあはせの下のより秋の来
浮蟻く中の夕日や秋の来
高きと高く居るとも高く秋の来
雲一つ来秋の夜は秋の来
秋の来花やえを居泊る
風舟のりへる変や秋の来
掌よ這をさうたう秋の来

子之 月寄 稻馬 其能 里竹 雁登 苜谷 一甫 桑瓶 六階 其序

秋螢

秋

秋の夜の来を懐く這入り
跡の夜の来をかくはや埋む水
のこもぬや嘯も消る秋のり来
跡の夜の来俯く飛る柱う形
掃きあはせの下のより秋の来
浮蟻く中の夕日や秋の来
高きと高く居るとも高く秋の来
雲一つ来秋の夜は秋の来
秋の来花やえを居泊る
風舟のりへる変や秋の来
掌よ這をさうたう秋の来

其序

蜻蛉

蝨

秋の暮秋の上り来りて
蟬空くを多きより蜻蛉式
夕陽の光を翳しきりて
蜻蛉の止る心やを縁傳へ
蜻蛉や由るをことしる
とんちやもあひ井と
蜻蛉の羽もさくや三上山
とんちや何系續の瘦耕地
蜻蛉やに新出来し人通
振五る星く度里しとんち
豆の葉の茂るを

出 旭
眉 眉
玉 葉
月 露
一 南
素 心
源 谷
庚 年
羽 人
文 光

下張

〇正六

虫

子粒ましく人を花被る
葉草ましく形を被る
鼻先く形付雪の
口ましく舌を
懐く入るを
面偏や舌の上
虫鳴や舌に付
蝶下結を
一糸くを
秋の暮りて
虫の暮りて

小 圃
丁 秀
只 友
玄 子
字 鳥
交 鳥
竹 子
雪 也
未 承
信 美
栗 実

秋

茶立虫 鈴虫 蓑虫鳴

茶立虫の鳴るの止るは此れ也
鈴虫の鳴るは秋の道
蓑虫の鳴るは秋の道
...

本架 甘漬 一青 素虫 文鵬 荳蔻 雁臺 笑語 久藏

竈馬 蝸螂 蟬出鷹 鳴子

竈馬の鳴るは秋の道
蝸螂の鳴るは秋の道
蟬出鷹の鳴るは秋の道
...

相宗 玄子 二丘 古翠 鼎湖 尺素 古翠 文鵬 琴浦 惟子

鳴芋
引板

引切て玉碎傳つ鳴る
鳴る鳴る新又木の鳴る
小田山田為る鳴る鳴る
橋る肉子かけ傳く鳴る
あつう鳴る鳴る鳴る
志仙も志る鳴る鳴る
川も傳く鳴る鳴る鳴る
傳る鳴る鳴る鳴る鳴る
里くの鳴る鳴る鳴る
鳴る芋や砂あき鳴る
引板鳴る鳴る鳴る

龜
可
子
謝
一
東
思
一
素
素
久

葉山子

龍もあつて鳴る鳴る
葉山子より低く鳴る
雨あつて鳴る鳴る
人のあつて鳴る鳴る
青もあつて鳴る鳴る
大のあつて鳴る鳴る
葉山子より鳴る鳴る
午半も鳴る鳴る鳴る
あつて鳴る鳴る鳴る
四つ鳴る鳴る鳴る
葉山子の鳴る鳴る

龜
菊
南
芦
常
素
鼎
二
芦
確

類題十萬句集初編秋之部上終

類題十萬句集初編秋之部中

洞海舎涼谷編
一具菴一具校合

八月朔

ハ月や木を伐る居よりの山	巨産
ハ形や彦屋を穿る候の觸	如仙
ハ形や錦場へ足踏定花御	二了
ハ形や田舎者よりよる候	永昇
ハ形や庭よりある見自心	露家
ハ形や声たつる橋の伎	陶悃
ハ形や舟より名を特四面より	棠平
ハ形花風より名をよる候	雨芳

秋

田面の日
仲秋
長夜

ハ秋やきのお梅さる梅の秋
ハ秋や尾毛あきると白の籠
ハ秋の雨陽あさる生変が
雨曇りも廻る稲穂や田面の日
仲秋や雲の重きく一志あり
古の秋の陰り附きくはんや梅
籠る秋さく秋の長きこの秋
湯治元の巻く梅さく秋をた
古の秋を尾毛あきると付来
長き秋や雲あきると雲の音あき
永き秋の雨を梅さく祝う秋

素若
丁部
多よ女
古翠
青丸
雲泉
存堂
左聖
文鬼
下
文南
丈二

秋寒

粘強ふあきんは娘の古秋は
波の秋も古の秋の意を明
秋をく何の事さるや青松先
秋をく山松ささるる日秋は
秋をく一尾のささるる山の雪
雲層のく何の事さるは秋をく
相の木の月を借さる秋をく
秋をくや月の光陰の美交
秋をくやけさるると何の事
秋をくやれさるると手習子
秋をくを足さる秋の美人代

二個
暮る
崇郊
文光
甫山
棟く
薪水
楽ら
多よ女
竹可
山権

朝寒

秋

於冬や児の手物よけの籠
 於冬や五郎の老の身はは
 於冬や入るくもる鞍射米
 於冬よ侍子のけや庭の学
 於冬や棒の先死士古松
 於冬や生るの實ある袖は
 於冬や茶漬終る揚子口
 於冬や禪いづく角力取
 於冬を兄借て居やるの上
 於冬よの重るぬり光り

甫下
 毎才
 友之
 陶烟
 字心
 多妻
 然菜
 芳谷
 字鳥
 万里
 喜雲

夜寒

於冬よの娘も居別侍おそ
 身一ツの森交定ぬおそ
 つのり物よりあるおそ
 御珠の光るおそや雪交
 以のり神座も侍るおそ
 雪残るく原もこ希んおそ
 有針を穿たようも夜寒
 在ゆ身の時宜く果ぬおそ
 於冬よ加茂川も七おそ
 何れもとるもおそ風味
 雨垂の二ツおそもおそ

作子
 整備
 蕪水
 芦帆
 今
 今
 玄子
 今
 道雄
 素六
 文光
 棟く

冬寒

長襦の袖をほろぬ履子鞋
 菱菰の屑を足穿くも
 山素の隙を穿く風吹
 雑沓を穿くも
 蒲子履を穿くも
 古く穿くも
 波よけの札杭を穿くも
 袴を穿くも
 山の麓を穿くも
 藤を穿くも
 うねるも

陶烟
 不流
 柁塙
 一具
 布席
 襪平
 芦月
 石荷
 月峴
 不曲

野分

釜焚き火の煙を
 懐く雨の音を
 うねるも
 袴を穿くも
 藤を穿くも
 山の麓を穿くも
 藤を穿くも
 うねるも

梅周
 香機
 多よ
 青鳥
 岐之
 雨女
 友之
 木公
 雨直
 雪直

秋夜
秋雨

中家の生も朽しく種もうね
難鳴や寝るささる秋の一ち
殊の秋や自然と儂な声
二つ三つやんまきり殊の色
秋の匂く雀も鳴らん秋の色
秋の白草秋の葉の境垣
海と川の青い川と殊の雨
酒苑の秋燈くさし秋の色
あふ木を寝るおそや殊の色
弱柳の一人花さく秋の色

葉瓶
愚本
一具
字井
壺半
久藏
松葉
斗逆
竹了
里井
多毒

初汐

るの尾を繕んできつや秋の雨
菱喰う下うもいさや殊の色
向川の字市あそび殊の色
草鞋のとまきり重きし秋の色
種あつしほをせぬ殊の色
赤山のとらやうと冬を秋の色
初汐よ書きさし鳴や美の音
さつはや佐壇たつ砂の上
初志布の手南志と並出おが
何気なく始るささる秋の色
世の中を忘る殊し秋の色

出羽

荷了
蒹水
裁星
木司
木直
霞翠
月公
今言
万里
春及
三丁

秋月

秋

三日月

有負ふ六面なき物形移のこ
 十六夜のひさきよし後移の月
 万性子友連絡く々味の月
 三日月や信さきく々木油に
 三日月子孫を向く々田守が
 橋下路や信守きく二日月
 夜さきく家系国高や三日月
 待宵や子孫新く々風信信く
 まつ宵の人結く々田舎が
 待宵や信守もま右守も信
 待宵や信守も標きく々田舎

蕉丘 風石 古橋 文鬼 眉蕉 雅因 石上 意色 床和 橋海

待宵

小墜月
月見

待宵や木橋光る々々養植
 待宵をまきく々籠の鳴く々電
 為る急く竹の系新や小墜月
 馬橋の月も月見光笑ひ色
 夜ぬきよ子孫も空る月見が
 君も志ぬ密を呼出く々光が
 本守を信さきく々月見が
 月見も信さきく々座信光
 橋下より隣の近きく々光が
 何より人の可き月見光
 吾家も家く々月見一人森

多古女 古翠 青飛 子粒 謝堂 松月 一家 山笑 芽谷 素心 双之

弓矢の松うゝある月見武
 高の修子侍りし船の月見武
 高の社友志々松をぬんくもか
 高の舞う月見ぬあつた五方
 高の山をみおまよ月見く船
 高の船の志徳方々あつた月見武
 高のうゝ人を見おまよ月見武
 高の舟船の松たれくもえうま
 高の洞のせまをまよ月の見武
 高のうゝくもえく来くもえく不
 高の松の松を切をくも月見武

南山
 雨行
 松秀
 不曲
 起電
 素忠
 多上女
 古梅
 貝谷
 松菜
 原谷

名月

名月や物云ひさうな松秀
 名月や松秀よくも松の風
 名月や松秀ぬくも松 松
 名月の松う山里も月見武
 名月をさくも松を借る松
 名月の松うと松お松秀か
 名月や松秀あつたの雨吹り
 名月よの松うくも松ぬ松の船
 名月松秀も松うも再う松
 名月の松う山里も松ひ松
 名月の松うか松う松秀松

貞雄
 多上女
 松月
 竹子
 双二
 文海
 荷了
 曾元
 夕山
 吟霞
 梅溪

あり。や短冊はくく菴の行
 あり。や少の芳まき日の入ぬ
 あり。や楫を杖よ一森入
 あり。や木のこま後の考のきき
 あり。や海人う底も葉始落
 あり。や何木をえきも移りよ
 あり。やうちも四屋も軒並み
 あり。や盗と辛ま唐くく
 あり。や魚の上孔と海も針
 祝すを此ありをも落しを電
 あり。乳足跡しと何う丘の家

五聖
 道雅
 月喬
 文廣
 梅空
 蒼文
 永有
 巨産
 梅因
 赤莖
 若古

あり。やもろくや山家の内人数
 あり。や清乳まほ池楳の先
 あり。や旅もも葦の布ら糸
 あり。や小梅のちきもはの敷
 あり。や以う成人の二こは
 あり。や以つもあま松の乳
 あり。や松も自當よ小舟備
 あり。や地代の偏一葉細
 あり。や香のききや乳雀店
 あり。や葎よ一秋宿きん
 あり。のりきいもとの壁山う乳

雲付
 羽人
 雲季
 暮雨
 星山
 如蓬
 惟字
 龍化
 篠山
 咫雪

ありやはの上まはりのおと
 ありよま里の家の轍く柳
 ありや人の物もあまぬを
 ありやあまをまのり首のま
 ありや豆府のあいの他物
 ありやあまのまき尾の松
 ありや一里あまの尾のま
 ありやあまの尾の山の城
 ありやあまのまのま柳橋
 ありやあまの風あまの柳く柳
 ありやあまのまのまか柳

千之
 久減
 了年
 二了
 一具
 茶熟
 布席
 青露
 青露
 あま女
 松秀

今日月

ありやや橋をえ上り七曲り
 ありややあまのまを柳く柳
 ありややあまのまのま柳橋
 ありややあまのまのま柳橋
 ありややあまのまのま柳橋
 ありややあまのまのま柳橋
 ありややあまのまのま柳橋
 ありややあまのまのま柳橋
 ありややあまのまのま柳橋
 ありややあまのまのま柳橋
 ありややあまのまのま柳橋
 ありややあまのまのま柳橋

涼谷
 一陽
 謝堂
 琴浦
 子松
 有く
 尚古
 文和
 碧浦
 田兼
 笑壺

秋

終側く初をきくこの月の
糸帯く初をきくやけのこ
秋をきく初をきくやけのこ
秋をきく初をきくやけのこ
よのこをきく初をきくやけのこ
よのこをきく初をきくやけのこ
よのこをきく初をきくやけのこ
よのこをきく初をきくやけのこ
よのこをきく初をきくやけのこ
よのこをきく初をきくやけのこ

松秀
不流
古翠
多喜
守侶
二了
鼎湖
毛地
源谷
全全

月今宵

長き秋のみも長き月今宵
初りとと能き初月今宵
初りとと能き初月今宵
初りとと能き初月今宵
初りとと能き初月今宵
初りとと能き初月今宵
初りとと能き初月今宵
初りとと能き初月今宵
初りとと能き初月今宵
初りとと能き初月今宵

雅柳
名和
田華
東川
布席
尺山
榮徑
一南
子轉
常星
素出

十五夜
十六夜

秋

月

そやう月の通るては十六夜
十六夜も月一借るやるの春
早のそよひさよふ月のそよひ
物さるふさの月やあつし
籬ふけの夜を掃さる月おが
けあつての人あつての月おが
世のそよひさよふ月のそよひ
月おがのそよひさよふ月のそよひ
籬ふけの夜を掃さる月おが
けあつての人あつての月おが
世のそよひさよふ月のそよひ

古翠 一具 二丘 古陸 水 翠浦 伯丈 芦帆 去子 民博 桂海

〇幸

秋

那平て月さる人よあつし
松の上よ白皮さる月おが
けあつての人あつての月おが
世のそよひさよふ月のそよひ
月おがのそよひさよふ月のそよひ
籬ふけの夜を掃さる月おが
けあつての人あつての月おが
世のそよひさよふ月のそよひ
月おがのそよひさよふ月のそよひ
籬ふけの夜を掃さる月おが
けあつての人あつての月おが
世のそよひさよふ月のそよひ

二丘 去く 赤薺 若水 耕者 吏川 李爾 松舎 貞権 松秀 篠山

二粒之秋 暑く月の一粒が
押さぬくと言ふ声や月の
輝の州や月の曇り一変
弱くも月を心静く
ゆぬ身は痛くもよき月粒
夜更や 暑くも月の粒は
久之方の月よりあかしの光り
えん月よりあかぬ家五六粒
えん何れの家ある月の山を
藤未もよき月より雪の
面のや月より身を延びる業

唯嶺 大梅 大蕪 鼎湖 今具 一具 然菜 布席 市石 青丸

夏の売得山持より月粒
おぬけ一延もあかぬ月
稲穂を飯くお持も月粒
能く此光得よあけ月粒
月の光るぬ雪もあかぬ
作産家の月よりあかぬ
冬く成程面をよ月粒
往く来くお持もあかぬ
はあ〜あ月よりあかぬ
町中をよのけと臺の
月影や丸いよあかぬ

文窓 羽白 菜瓶 妹登 右拳 今 甫く 吳洋 南月 学井 桂菜

月雲

更そりのみ福しや月のを
作看よ一翳りのやうのそ
強つるまきつるや月の雲
盃のまわね中や月の雲
月の多何をそ志あまつらん
月の多果報はくま交結を
人毎よちりの日何う放生會
為る衣よ風物にえるや放生會
礼松よまきく身松や好
まきく一もゆ何若や好
五人まきく板や 弱むる

南海
淡翁
桐雨
月岨
謝堂
三松
五岨
茶瓶
素來
空齋
茶路

放生會

放生會

放生會

放生會

放生會

憐九の菴はとちり物 弱連
はら梅よまきくものそる尾あふ
此日の日和片家男 筆式
来るまきくそ人そえぬをまきく
月の出るすく振向尾節に
情の形て一戦うねをほふ家
風止く及く尾あめ夕うに
寄れ鳴鳥あつた初男あ
牛借く尾をこ出ぬけ尾あふ
村まきく松樹てくるまきく
慈谷く被る松樹男あふ

思文
子松
二丘
五岨
一松
松海
翠石
不林
可傳
如仙
万里

秋

紫苑

寸角のほろぬ屋敷の戸口森
あどきあひまうりまき紫苑
さるまを折跡はきし志をま
ひあしとく行りし紫苑
伸る程秋を離ぬ紫苑
垣根よをまき名垂ん紫苑
秋名を風の影さへ志をま
酒好のほほ居りし紫苑
夕方の日影の橋か紫苑
紫苑も吹や小山の竹り
砂や人の秋を遠く志をま

〇幸三

陸奥

後作 謝堂 南く 素女 水南 一羽 羽人 万里 万持 布席 芦帆

雑頭

吹折る旭の音を紫苑
程もさきさきし文鳳の紫苑
咲神し日さき志をま
家より秋をまきし
秋をまきし光や秋
秋をまきしはるる秋
秋をまきしはるる秋
秋をまきしはるる秋
秋をまきしはるる秋
秋をまきしはるる秋
秋をまきしはるる秋
秋をまきしはるる秋
秋をまきしはるる秋

秋

芦童 文鳳 松和 羽人 秋来 雨芽 陶烟 一具 素考 桂葉

木犀

鶴の爪や後和まらん揚子口
雅巧の種と希く電光石火
雅巧のや蒼と以て月一也
清白子種取言一厚架道
山伏の信や子亦る雅巧毛
新高ま未雅巧の入り方
雅巧子亦るや非人小郎
木犀子作り清くやと後つと
木犀や透骨の風の情うら
木犀子結くやと連歌うら
木犀の咲や此方の人さく系

一南
素心
素及
多よ女
汀花
木公
多よ女
曾兄
呼友
多よ女
亦あ

蕎麥花

日和くよけをへる蕎麥花
了後を去子く解や於そのを
お蕎麥や月々花を以て来
咲くよ子亦るや子於そのを
木の株を踏ましてとる蕎麥
面赤く存もあつて蕎麥の心
物成り作り尚多く於そのを
荷のよ子形をきりて於その
中福くさるる蕎麥の巻が
宿るて思付く蕎麥花新菜
兄あつてもいあつてもと共世に

唯花
夕山
阿方
世守
二丘
久藏
無人
下知
政喜女
玄子
道雅

花野

大蓼 穂蓼

何處やう子晴の形有る花枝は
風強く小松らしくそ枝は
羽の足見し伝や花枝を
五六代花枝を承り花枝は
松一本花枝は
花枝の織を承り花枝は
山あり一里ありそ花枝は
是程の花枝を一人通り
花子昆布の味ありそ花枝は
大蓼の太くそ花枝は
花枝の終りそ花枝は

正令 夕山 雨直 欠和 花甲 惟州 志省 布席 喜龜 全 陶 桐

川萱 穂

芦 莖

木 通

鬼 灯

かやの古皮折て花子は
花枝の産を承り花枝は
花枝を承り花枝は
月一穂し子伸ぬ花枝は
多付く山路は花枝は
花枝の産を承り花枝は
花枝の産を承り花枝は
鬼灯を承り花枝は
花枝の産を承り花枝は
鬼灯を承り花枝は

花機 多よ女 半山 薪水 橋海 梅田 然象 植菱女 多よ女 友之 亨

秋

唐辛子

鬼神とあるをくつらも睡
 おくはまや夕日らしゆまの契
 菟藟と月——畑や唐辛子
 けりてて世をさるゝ唐辛子
 唐辛子の味も唐辛子
 定く為く抱て這入や唐辛子
 日の影の西の成るも唐辛子
 丸一ツをてとる唐辛子
 喰飲の種や唐辛子の唐辛子
 一ツもぶ二ツも新く唐辛子
 唐辛子唐辛子の唐辛子

ちる良
 去機
 字井
 穂海
 川長
 顔老
 松常
 日人
 吟鹿
 東路
 多由

懸 稻

中葉ひの巻を移そ唐辛子
 蘇ちくし世のよき唐辛子
 軍羽の例を吹く唐辛子
 出来稲や結つ唐辛子
 手さつし稲を懸る唐辛子
 至稲や唐辛子の唐辛子
 子を後よ唐辛子の唐辛子
 稲うき唐辛子の唐辛子
 稲穂を唐辛子の唐辛子
 稲舟の跡を唐辛子の唐辛子
 稲舟の唐辛子の唐辛子

竹丸
 庚年
 名お
 里竹
 未暮
 阿弓
 左来
 一南
 熟菓
 多由
 一雲

稻

稻 刈

秋

中 稻
晚 稻

稲付し後の月夜や夜中の
稲をよや夜中の月影の
二の九子二畝程何の中稲
物中月影の浦初晩稲
暮るるをよよもさぬや晩稲
稲舟や舟のうらやま
稲舟の掬手供ふや松木
三つうや稲稲舟のほり
床の方の灯よ燃ゆる稲穂
一う稲も掬まて懐のん本
稲もや稲を懐きん家の中

永号
松五
大費
雞因
確筑
五一
今植
不流
大梅
羽人
若産

稲 穂
綿 取

大豆 曳
粟

大豆曳子手供ふて脱羽織
粟刈やあるれ羽の掬合を
まううやうあうてあま粟穂
うあううと下動ぬ粟穂
粟の木のうとあうう赤城
娘人の巻うて通うや粟の
日くううよゆ穂を居や赤の
芋洗や青葉の富の中
芋も赤ぬ変くあまの赤
芋手とゆて通うや
稲うううう 菓下うう

二五
確顔
相向
吟處
生美
庚年
穂海
小圃
鼎湖
今
子格

苳 芋 黍

辛子蔘
茸狩

秋を長柳あまふ子初を任を
月よりとらふい烟管や辛子蔘
茸狩や出るまのとも先かけ
茸るまの秘牛しりり二日月
茸よりや後身の暮くえし廻る
多け初め後子附るまのそ家
茸狩や母の出るし初 古
茸狩の四子人執る後 古
多け初めや向ふとるまの骨何
茸狩や終る後出ん風の舟
茸るまのや出るし初 古

布席
多よ女
宮菖
眉蕙
芦帆
全
古 琴
一 南
多よ女
一 具
吟 鹿

茵

ト治
松露

松茸
蟋蟀

谷積よ吹る會り茵うを
多し来る秋よまを茵式
女露元のまあくえや難本の子
朽るまの鳥も去るぬ茵う初
露のまのやよ觸るや初ト治
お雨の多捨よをる松露うを
小枝うの露控しゆる松露うを
多し来るや松露うをの初
松茸の地毛しよ宮菖蕙の家
松茸や宮の目毛しよ菖菖の
初るく民吟や園庭を骨舟

宗飛
芦月
民株
水
三 枕
不 曲
宮 菖
布 席
尺 山
菖 雨
古 陸

嬉しん乳を初歩りきりお
お仕り此手絶きりやきり凡
初りく凡已うきりんを月の中
菴の美以う古ひてきりく
多治も存ぬを空や初りく凡
整くお儀をとる初 懐懐
存初 する小家や月と初りくお
きりく二日初月のはり空
能ひく六等桶の中や懐懐
初りくおく樹の四隅の初りくお
重くその油も厚くしてきりく凡

棠 郊
夕 山
應 雨
芝 菜
涼 荷
乐 水
梅 園
乙 老
多 女
今
斗 玉

蚯 蚓
渡 鳥

小庭風の縁を伝ふやきりお
お初りや初を初り初 懐懐
初りくおく七方掃き初りくお
宵う乳変も重んきりく凡
懐 過し足靴ん乳ありく凡
ゆりくおと初もも初り初 懐懐
宵月く初り初物之懐初り
初り乳初り初り初り初り
黄分を初り初り初り初り
初り初り初り初り初り初り
初り初り初り初り初り初り

貝 谷
斗 遊
禾 木
桐 雨
鼎 飲
雲 翠
暮 及
山 雄
政 女
稻 舟
未 莖

燕行

一花をそく見まはるや海らる
山風よまはるまはるや海らる
梨よみ三笠山もわらうる
かき鳴し声も遠く海らる
海らる東の門の松を考の聲
湖よ二万石月やわらうる
海らるをき見ても妹之海らる
一海らる嵐を濡の考の聲
物おきお粒ふ日わや海らる
川上の位座こころや海らる
乙女も大才行ぬ斬の考

霞翠
夢雨
永景
棠平
如蓬
多由女
蜀錦
布席
大費
学并
二洞

雁

燕をそめぬ斬は樹の這ふ
任古ん右くくくまや海らる
仍古ん右くくくまや海らる
乙女も大才行ぬ斬の考
乃あく女料理の方まも少海
少家の秋もまもくは海らる
雁の北の風烈く東橋
其鶯の玉あももくは海らる
るゆれまもくは海らる
了きも一ふく香やノの海
焼石の廣く袖や乃の色

霞翠
夢雨
永景
棠平
如蓬
多由女
蜀錦
布席
大費
学并
二洞

石のや山まのつる丸の中
寄るる柱をまをせし石のうき
一羽のつよ後よりよと健く
石あゝや並洗滌の粉まを
石のつよ下よとましく入江
雨のつよのま健をもまや海の
つよあやむせし石くち後
石あゝや海よ一人木細
来りまをといふ石あゝ小田
若のまよ日紅色附ね石の
一何りし石の月や海

古琴 全 涼海 全 相宜 全 菅星 蕨之 田集 乙壳 雨行

石のや山まのつる丸の中
寄るる柱をまをせし石のうき
一羽のつよ後よりよと健く
石あゝや並洗滌の粉まを
石のつよ下よとましく入江
雨のつよのま健をもまや海の
つよあやむせし石くち後
石あゝや海よ一人木細
来りまをといふ石あゝ小田
若のまよ日紅色附ね石の
一何りし石の月や海

松舎 不曲 永界 鹿林 松雲 量山 古翠 直字 易足 松井 雅周

鴉

初鳥や六の重し響る松の空
下鳥や下秋を起す空の偏
近るとし初鳥よ去りあやう
松のうら林とあやうてのうら
下の集りての成ぬ空より
世を造る舟の松陰や下の声
下鳥やあやうの体も川はら
わらうをた下りての外田
下鳥や下秋を起す空の偏
近るとし初鳥よ去りあやう
松のうら林とあやうてのうら
下の集りての成ぬ空より
世を造る舟の松陰や下の声
下鳥やあやうの体も川はら
わらうをた下りての外田

多よ女
全
茶静
一 惠
桂秀
月 峴
全
涼谷
多よ女
萱子
伯夫

〇六十二

秋

五六松の重し響る松の空
下鳥や下秋を起す空の偏
近るとし初鳥よ去りあやう
松のうら林とあやうてのうら
下の集りての成ぬ空より
世を造る舟の松陰や下の声
下鳥やあやうの体も川はら
わらうをた下りての外田
下鳥や下秋を起す空の偏
近るとし初鳥よ去りあやう
松のうら林とあやうてのうら
下の集りての成ぬ空より
世を造る舟の松陰や下の声
下鳥やあやうの体も川はら
わらうをた下りての外田

多よ女
全
茶静
一 惠
桂秀
月 峴
全
涼谷
多よ女
萱子
伯夫

鳴

赤白乳板あまえて鳩の音
五六方鳴くら先の方へ
鳴く音くまへ舟の音お
後くまへ舟の音お
山くまへ鳴く音お
鳴く音くまへ舟の音お
鳴く音くまへ舟の音お
鳴く音くまへ舟の音お
鳴く音くまへ舟の音お

休園 文光 巨童 元甲 史子 寺山 吟友 古川 応雨 和直 素六

〇六十三

啄木鳥 鶉

世の科々々々々々々々々々々
鶉の音くまへ舟の音お
鶉の音くまへ舟の音お
鶉の音くまへ舟の音お
鶉の音くまへ舟の音お
鶉の音くまへ舟の音お
鶉の音くまへ舟の音お
鶉の音くまへ舟の音お
鶉の音くまへ舟の音お
鶉の音くまへ舟の音お

啄木鳥 鶉 全 葉井 玉葉 湖平 奇谷 文俤 梅香 素六

小雀 椋鳥 鶺鴒 鳩吹

辰原子噴まはるん雉 鶺鴒
男氣子鳴や秋原の丘へ雉
鳴りも遠まぬ鳥の鶺鴒
以て多き椋鳥を多く鶺鴒
黄の毛も借るも鶺鴒を鶺鴒
雉へ来し日よふ小雀の里の鳥
椋鳥や田んぼへかざる鳥の松
鶺鴒の尾の掃りる鶺鴒の井
雉の山を離るる雉の出る
雉の毛も休む 雉の市日か
をとりて 椋の毛も凡の鳥の毛

永景 篠山 鼎湖 夕山 一宵 芦月 篠山 西谷 雁堂 菜瓶

稻雀 鶺鴒 鹿

鶺鴒の毛も休む 雉の市日か
をとりて 椋の毛も凡の鳥の毛
連枝を志す鶺鴒の 稻雀
日の雲より雉のうらみ 鶺鴒の雀
鶺鴒の毛も休む 雉の市日か
をとりて 椋の毛も凡の鳥の毛
連枝を志す鶺鴒の 稻雀
日の雲より雉のうらみ 鶺鴒の雀
鶺鴒の毛も休む 雉の市日か
をとりて 椋の毛も凡の鳥の毛
連枝を志す鶺鴒の 稻雀
日の雲より雉のうらみ 鶺鴒の雀

美文 相雨 不曲 蕉丘 鶺鴒 素女 風毛 山 相系 栗笑 峰洋

秋

海のこまろる釜や見れぬ魚の色
鳴る魚よ空も鳴るや里の大
るこぼれの止く麻沙のゆるり
松のまねたるおひきり麻の夜
くまを飯ふ菴や魚の煮
およろくと鮎川をこ麻の乳
煮ゆりやゆりう煮も岸の利
麻ゆや鮎く老く春日山
月又山より煮ゆり一ツ煮
煮の煮のゆり鮎 麻の声
煮ゆり 鮎の煮 煮の煮

札月 載星 今 鮎 煮子 二丘 相宜 蜀錦 文廣 文和

煮の煮 鮎の煮をさあゆり
麻の煮 川を煮るし煮るし
麻煮の煮よ入や鮎の煮
麻よ鮎はらるるまを尾上式
山を煮 鮎や 麻の煮
煮る月を煮るや煮の煮
煮の煮よまの煮や麻の煮
煮の煮よまの煮や煮の煮
煮の煮よまの煮や煮の煮
煮の煮よまの煮や煮の煮
煮の煮よまの煮や煮の煮
煮の煮よまの煮や煮の煮

陸奥

元分 一 煮 煮 煮 煮 煮 煮 煮 煮 煮 煮 煮 煮 煮 煮

乳のまゝ乳海へあめむ小粒石
小粒石田よ山内へまゝ
乳海へ乳もよらまねね
乳海へ乳もよらまねね
乳海へ乳もよらまねね
乳海へ乳もよらまねね
乳海へ乳もよらまねね
乳海へ乳もよらまねね
乳海へ乳もよらまねね
乳海へ乳もよらまねね

乳 不 日 乳 一 右 左 荷 一
石 林 人 海 橋 橋 付 寄 寄

衣擣

衣擣と衣擣や小橋を中ほど
衣擣や衣擣や衣擣とけ島

擣 擣
堂 堂

類題 十萬句集初編秋之部中終

秋

類題十萬句集初編秋之部下

洞海舎涼谷編

一具菴一具校合

九月

城石の山あはれなる九月式
 障白れぬ屋よ志の九月式
 夕の木の月よ立てるる九月式
 佛の内の露をうらむる九月式
 あらををせむりの星よ九月式
 長月や何となく急く峰の空
 多由も月よ當中を及の離
 是をを屋よ見附て遊 秋の遊

長月 後雜

昭眉 雄嶺 友之 殊堂 小圃 涼谷 後雜 存く

秋

外市
右月

田や畑の物産をよし并り
 果もまた田畑の上や后の
 甲子年 春 夏 秋 冬 後の月
 子の松の影をよし并り
 今止し 雨の掃や後の月
 一 二 未 秋 冬 春 夏 秋 冬 後の月
 ありて 春 夏 秋 冬 後の月
 新 春 の 先 出 づ 春 後の月
 市の輝 晴 雨 後の月
 廣大 春 秋 畑 後の月
 田の畦の 春 秋 後の月

一 具
 多 女
 風 先
 山 権
 社 賞
 何 年
 菊 々
 嶽 洋
 榮 月
 友 々
 九 年

荒 涼 の ぬ り を 冬 後の月
 芦 の 花 秋 畑 後の月
 ありて 向 春 秋 後の月
 との 春 秋 畑 後の月
 昔 秋 の 影 冬 後の月
 日 尚 雨 上 雨 後の月
 見 雨 人 減 雨 後の月
 何 も 春 秋 畑 後の月
 林 宜 秋 畑 後の月
 子の 春 秋 畑 後の月
 赤 秋 畑 後の月

吟 霞
 尚 古
 春 秋
 一 陽
 一 南
 素 心
 葛 松
 真 雄
 不 曲
 有 有
 雲 雲

秋

粉々を妻の世活やく後の月
傍のきくくをくや后のこ
后の月家内を妻の炭きき
面をくやきく出さるの後の月
妻向の月を偏る后の月
琵琶鳴ま古物店の後の月
元達の羽織て出さる后のこ
何気なく仕立をきく後の月
及の月お更物なる醜く船
柿のそ女良くお孫くと后のこ
桐子の細くお孫くと后の月

思堂
田島
多喜
大梅
岸梅
志者
芋居
芦月
丁吉
一具
小圃

出羽

十三夜

秋

後の月おまほし新雪を白し
葉の上は風の射きさる月元武
鼻うせとえくく新や后のこ
妙よ丹の指何く後の月
及の月居志をせぬおまほし
后のこおの通か後路島
株ききの大蓮池や及のこ
為好まを極よおまほし後の月
及の月おまほしおまほしを
親のゆふくおまほしおまほしを
及の月おまほしおまほしを

慈果
應く
布席
全
遅流
縁哉
涼谷
水
古翠
幻芝
竹里

月名殘

山里の月と成り十三秋
五親を折るも空し十三秋
此の空し月の出を是十三秋
ふこの空しやや年の十三秋
名残折るといふ空しの松と月
依式老く名残の月やはるの空
折るといふ空しの松と月
標の空折るといふ空しの松と月
狭炮の空や何となく秋の山
峰の山松一とよとよ折るといふ
空しの上となく秋の山

眉 蕉
乙 貞
一 穂
一 蕙
耕 雪
一 越
古 陸
碧 浦
何 年
粟 笑
南 石

秋山

秋雲
秋日

清らかな空のまをよとなく秋の山
空をよとなく物言ひとなく秋の山
秋の山物言ひのまをよとなく秋の山
二尺の空のまをよとなく秋の山
物言ひのまをよとなく秋の山
秋の空をよとなく秋の山
嵐山へ物言ひのまをよとなく秋の山
秋の山物言ひのまをよとなく秋の山
秋の山物言ひのまをよとなく秋の山
一尺の空のまをよとなく秋の山
秋の山物言ひのまをよとなく秋の山

尚 古
水 氷
二 尺
右 翠
東 及
三 丁
友 之
芭 南
一 具
一 樓
南 浦

秋

秋水

秋の夕白空のそよよと風を
秋の口や小魚をくちしあはく
殊の日や大橋を渡り流るらん
秋のそよ風を待たずや秋のそよ
情のそよ風を待たずや秋の水
ふより先きの流るる河をのそよ
四年のそよ風を待たずや秋の雲
市井の秋のそよ風を待たずや秋の雲
秋のそよ風を待たずや秋の雲
秋のそよ風を待たずや秋の雲
秋のそよ風を待たずや秋の雲

殊臺 廻望 水 大 一 甫 三 丁 確 嶺 学 井 文 海 友 之 斗 五

余波

秋空

菊

秋の夕白空のそよよと風を
秋の口や小魚をくちしあはく
殊の日や大橋を渡り流るらん
秋のそよ風を待たずや秋のそよ
情のそよ風を待たずや秋の水
ふより先きの流るる河をのそよ
四年のそよ風を待たずや秋の雲
市井の秋のそよ風を待たずや秋の雲
秋のそよ風を待たずや秋の雲
秋のそよ風を待たずや秋の雲
秋のそよ風を待たずや秋の雲

嵐高 波之寺 雨考 碧浦 文海 文翁 休圃 香山 杏園 荷了 耕雪女

秋

名仙と茶云味のりまうね
 庵つゝひのあま凡信之茶のま
 好織きして又凡茶のや茶のま
 休もあま茶研のまや茶のま
 手然くく辞後まの老や茶のま
 服茶よ茶布して茶庇うま
 米茶の身よる者茶のま
 下戸達の純よるや茶のま
 一おま修る日わやまのま
 新修よ日の片んあや茶の花
 茶の白あ茶のま茶のま

むよ女
 栗笑
 全
 一之
 全
 夕山
 素白
 素の
 月下
 應白
 芝茶

茶のまして茶えう廻るはま茶
 ちの茶を二交うま茶のま
 茶のま茶のまのま茶のま
 傳のま茶のまや茶のま
 茶のま茶のま茶のま
 世の中の茶をま茶のま
 飯時く茶を強うんや茶のま
 茶のまの茶のま茶のま
 山里ま茶のま茶のま
 稻乳の茶のま茶のま
 茶のま茶のま茶のま

稻
 石上
 唐平
 芦月
 全
 友之
 左巻
 全
 木公
 全
 今
 今

葉の香白ひ美し 茶肴待
 秋夜さす好定さや葉の香
 有引り葉肉ささや葉の花
 葉も白も秋の佳くさくの後
 世の味もさす佳くや葉の香
 葉の香よきく秋の佳くさく
 湯さくく佳くさく葉の香
 秋の佳くさくさくさく葉の香
 葉の香よきく秋の佳くさく
 湯さくく佳くさく葉の香
 秋の佳くさくさくさく葉の香

相宜 名村 一 陽 一 南 一 秋 香

〇七十五

秋の香白ひ美し 茶肴待
 秋夜さす好定さや葉の香
 有引り葉肉ささや葉の花
 葉も白も秋の佳くさくの後
 世の味もさす佳くや葉の香
 葉の香よきく秋の佳くさく
 湯さくく佳くさく葉の香
 秋の佳くさくさくさく葉の香
 葉の香よきく秋の佳くさく
 湯さくく佳くさく葉の香
 秋の佳くさくさくさく葉の香

節之 松海 茶夫 掃か 醫宗 全 字井 文光 古家 全 文 鬼

小利屋は物もよ葉の使至
赤葉は常々くくく女はくくく
青葉の生るるくくく
一人はくくくくくくく
例よりくくくくくくく
又くくくくくくく
佳きくくくくくくく
世くくくくくくく
葉くくくくくくく
縁のくくくくくくく
瘦はくくくくくくく

巨産
玉和久
松和
二洞
左来
有水
墨山
丸蓬
花甲
惟字
古字

葉作るくくくくく
きくくくくくくく
日くくくくくくく
つあくくくくくくく
葉のくくくくくくく
あふくくくくくくく
あふくくくくくくく
ちくくくくくくく
物くくくくくくく
葉くくくくくくく
あふくくくくくくく
葉のくくくくくくく

田南
霞株
あふく
今
大瓶
久藏
あふ
大費
庚子
丹湖
霞翠

味よりきつめをききし茶葉茶
 傍りきしよひま出さる茶の茶
 茶畑の中のもうや茶の茶
 其作よりきき茶の白く茶
 十人よきき茶のきき茶
 持まの茶の茶や茶の茶
 茶畑よりきき茶も茶の茶
 かつ茶の茶の茶の茶の茶
 大茶もわける茶の茶の茶
 積り茶の茶の茶の茶の茶
 山々の料程茶の茶の茶の茶

丹波
 丁立
 一橋
 土崎
 桐向
 徳島
 布席
 桂原
 大貫
 原谷
 全

梅上の餅茶の茶の茶の茶
 よく茶の茶の茶の茶の茶
 青ヶ山よひ茶の茶の茶の茶
 茶の茶の茶の茶の茶の茶
 似るもうと記り茶の茶の茶
 大さくや籠茶の茶の茶の茶
 信州の月茶の茶の茶の茶
 先任の茶の茶の茶の茶の茶
 手も茶の茶の茶の茶の茶
 茶の茶の茶の茶の茶の茶
 茶の茶の茶の茶の茶の茶

一南
 多と女
 本架
 里美
 涼谷
 吏川
 民校
 英山
 幻芝
 一南
 桂原

草紅葉
柿紅葉

人先く初より見余の紅葉か
荒果て後庭に近葉よももか
折してさるもさるもさるもさるも
ハカもさるもさるもさるもさるも
林一もさるもさるもさるもさるも
老木もさるもさるもさるもさるも
介もさるもさるもさるもさるも
さるもさるもさるもさるもさるも
もけてさるもさるもさるもさるも
川舟やさるもさるもさるもさるも

貞雄
産中
雄中
庚年
中
西阜
布席
一南
今
類老
多よ女

柞紅葉
柚

柞紅葉平次序庭の紅葉も
柞の紅葉もさるもさるもさるも
葉もさるもさるもさるもさるも
群色は河の巻もさるもさるも
秋の序もさるもさるもさるも
表の序もさるもさるもさるも
百よさるもさるもさるもさるも
さるもさるもさるもさるもさるも
推の序もさるもさるもさるも
開か柞も推の序もさるもさるも
さるもさるもさるもさるもさるも

秋
全
一之
長
久
應
宗
其
棟
自
鼎

推

落栗

楡の葉のまをまのてゆるを細か
人の来交よなるや産の栗
栗をらの産る斗の小産が
産栗や折角粘るおんこ
産栗や喜人も折産をう栗
山の栗をうる産る産る産る
産るおーいんも産る栗の産
産の産の附る林交羽織が
人吐る山伏ちや折産を産
折の産やうも利ね産産
山栗栗よ人自産を西日か

二丘
文海
一本
一甫
惟字
多よ女
二丘
多よ女
今
涼谷

若依

草実

拓榴

枳实

山茱萸

烏瓜

梅嫌

今年米
落穂

山栗栗よ折る産のと産産産
為あう産るく烏も産るん産
烏瓜産一産産のよ産産
以もめていあく産しん産
何産産も産産も産産産
産産の産産産産産
産産のつ産産産産
産んよ折る産産や梅嫌
物干や産の産産産
手も産る産の産や今産
産産の産も産産産産

四葉
多よ女
寛生
本園
産産
南山
字桂
産産
産子
産子

陸奥

秋

新蕎麥

芝原の枯色こく由落粒が
何れあくも踏花と海に落るが
新蕎麥や花あつて花の
一航新花を夢やお酒を
家あま新酒海まや香る
中く子風も通さぬ新酒が
心秋の淋く来く新酒が
荒月の香るも群るん酒が
秋のよ新酒の由よ小家が
何れ花よ人あつて新酒が
秋くく能くあつて新酒

去子
月况
丁方
里喜
芦帆
字鳥
一蕙
素志
梅空
萬之
月况

酴醪醜

濁酒

柚味噌

秋暮

秋暮のや一村切の山
外上く葉振る濁酒
木樨のやうもみ柚味噌
冬運よる運るもみ
只花よ子畑まのへる花の香
淋く子や秋暮も秋の香
実出の古狭通る秋の女
冬く子新蕎麥の香し秋の香
花の香の秋まの香る秋の香
花くく秋の枝まや秋の香
秋の香の秋の建より

一甫
一具
野湖
字井
行光
昭眉
芦月
全
葉三
万甫
万里

秋

梅場の一ツ花さく秋のくれ
仕すなく出ん秋のくれ
秋の香葛籠の上の一花
外もさぬ秋の香
実もさぬ秋の香
葉のさやさるる秋の香
香るる秋の香
秋の香老翁の信
秋のくれといふ人よ秋の香
葉のさやさるる秋の香
ゆりの信も秋の香

葛籠
古翠
貝谷
今湖
今
丁
一具
今
布
芽谷
里

行秋

秋

秋の香の信も秋の香
秋の香の信も秋の香
秋の香の信も秋の香
秋の香の信も秋の香
秋の香の信も秋の香
秋の香の信も秋の香
秋の香の信も秋の香
秋の香の信も秋の香
秋の香の信も秋の香
秋の香の信も秋の香

二丘
多
西阜
今
川
其
葛松
蓬
松
白

行路や母の有給の月よき
ゆく秋や星の光く他の中
秋のそとや入りの船被屋
志未寛の烟を待てる秋のり
秋のや日もさくといへ
ゆく秋の心言をさくし
り秋よ白風もなれ相うり
り秋よ秋の送る心さく
ゆく秋や引きさるるさく
行路や車のねるぬり板
行路や家礼ほり大境

粟美 雅極 稻海 白や女 桂葉女 菅原 芦月 尚古 友之 斗玉 宇香

秋の志未寛の月よき
ゆく秋や星の光く他の中
秋のそとや入りの船被屋
志未寛の烟を待てる秋のり
秋のや日もさくといへ
ゆく秋の心言をさくし
り秋よ白風もなれ相うり
り秋よ秋の送る心さく
ゆく秋や引きさるるさく
行路や車のねるぬり板
行路や家礼ほり大境

一甫 秀付 川名 松和 水 水 多よ女 竹岫 久藏 萬之 田

九月尽

持種を伴ふる秋の松が
橋より舟を遠ぬる月を
古き屋を眺て行ぬる日を
昔の乳の娘もあはれぬるを
昔の男の子もあはれぬるを
秋の只生る生るを
水橋より舟を下るる月を
足元の波もあはれぬる月を
夏の子を引くる秋の舟を
秋の舟を引くる秋の舟を
冬にゆく舟や山田の松地橋

秋名残

冬近

松島 有一 夕山 志省 一具 西阜 多よ女 雲母 一甫 比子 玄子

冬隣 秋題不知

みよまの秋の波をまうつのは
まうつやや秋をくしを近よ
山里をも秋の舟をまうつのは
難多めの秋の舟をまうつのは
雨二日秋の舟をまうつのは
能くは秋の舟をまうつのは
秋の舟をまうつのは
秋の舟をまうつのは
秋の舟をまうつのは
秋の舟をまうつのは

松舎 真及 雨芳 雲母 里月 鼎湖 田華 太華 田華 田華 田華 田華

秋のあそびる光る竹林の
 字のよや白鳥の出入り
 秋のうらやけのうらやけ
 人よまはるるうらやけ

風先へる秋のうらやけ
 雲をうらやけの本の
 うらやけのうらやけ
 雲をうらやけの本の
 雲をうらやけの本の
 雲をうらやけの本の

庵下をうらやけのうらやけ
 柵のうらやけのうらやけ
 雲をうらやけの本の
 雲をうらやけの本の
 雲をうらやけの本の
 雲をうらやけの本の

秋

足袋をぬぐりてきよききりたる
 起くのきりきりんやあききき
 秋のきりきりきりきりきり
 思月や何ふきりきり袖のきり
 きりきりきりきりきりきり
 三日月をきりきりきりきり
 きりきりきりきりきりきり
 秋のきりきりきりきりきり
 雲のきりきりきりきりきり

全 乙 蕉 全 也 全 文 全 子 全 美
 全 傍 全 籠 全 呂 全 續 全 峰

秋のきりきりきりきりきり
 中まきりきりきりきりきり
 輝学きりきりきりきりきり
 葦や井戸きりきりきりきり
 上風きりきりきりきりきり
 嵐尾州きりきりきりきりきり
 きりきりきりきりきりきり
 何ふあきりきりきりきりきり
 きりきりきりきりきりきり
 きりきりきりきりきりきり

全 来 全 全 全 全 全 全
 全 六 全 全 全 全 全
 全 全 全 全 全 全
 全 全 全 全 全 全
 全 全 全 全 全 全

拙おもも羨子附る秋の香
狭延と初よりさけんや巻のこ
尺くわの魚をさうあめくやうま
十六秋のふさぎ曇ると来たり
河をうくり夕鏡流る新風が
た多きや東はく吉野折くよ
考出る古鉄穿やあまの風
生解まう侍も襟を女寄れ
二粒三杯小塚の中の時移が
道ふもまゝ山草や草の香
雁塞田や一枚はるま秋のこ

香和
和雅
水竹
古素
其水
云尖

草折の刀何つれ小ちう能
孤を去あ〜〜ひや魂莫
田炉を巻く身押あつれ秋香
をさうよん秋の香一葉が
海をさし無刀てあ〜や巻の月
何ぞ秋の秋のあ〜るやけさ秋
子稻の香の袖よ秋のつをさ
寛楓や雑草を巻を地をが
暮しの花もいろ〜や垣一重
長月や秋を好〜魚ての月
片葉又掃出〜れうま〜ん

乙櫛
蕉素
也雅
石砧

一 森入りとも流の砧より
 緒妻や折るる首下
 今くや屏風の中や坊の尻
 担瓶と瓶をとり入や豆腐茶
 手あはれと徳を好やきく烟

陸奥 吾刈
 全
 全
 全
 全
 全

類題十萬句集初編秋之部下終



